

片思いの男の話

好きな人と一緒にお酒を飲む。それは大人になってから知る楽しみの中のひとつだろう。ビール、日本酒、焼酎、ウイスキー、カクテル。飲むものは人によつて様々であるが、一緒に飲む人が良ければそのお酒のおいしさが何倍にもなる。

僕はさつきから、軽く目を閉じて口の中でウイスキーを転がしている。舌を焼くような熱さを楽しんだ後に思い切つて嚥下した。喉が熱くなると同時に深い香りが鼻を突きぬけてきた。

「ゲホッ、ガホ」

そのまま思いつきりむせて、深い香りは消えていった。「だからウイスキーのロックなんて止めとけつて言つたんだよ」

大きな手が僕の背中を優しくさすつてくれた。

「ありがとう、幹事。しばらくそのままさすつて」

「はいはい」

頭がクラクラしていたが、水を飲むとそれはすぐに治つた。

「もう大丈夫。」

「そうか。」

幹事はそういうと黙つて僕の横に座ると先ほどまで食べていたトリカワを再び食へ始めた。

「ふう」

ため息をつきながら、無意味にウイスキーの入ったグラスにデコピンをした。カラン、とグラスに入っていた氷が心地の良い音をたてた。もう何度か突いてみたがカランと音を立てることはなかった。仕方なく顔を上げ、壁に寄りかかった。自然と一番奥のテーブルに目が行つた。

居酒屋『玄海灘』の座敷席にテーブルを貸切つての高校の同窓会は大いに盛り上がっていた。まだ卒業して三年目だというのにクラスメイト三十九人二十八人が集

まるという大盛況ぶりである。同じ地元の国立大学に進学したやつまで、まるで10年ぶりの再開をしたようにふるまっている。

「時間の飲み放題コースで」時間半も過ぎると料理もほとんど食べ終わり、元気のいいやつはあちこちのテーブルを移動しながら大声で話したり、チューハイやビールを水を飲むかのようにグビグビ飲んでる。逆に酔いっぱいぶれたやつはテーブルに寄りかかったり、座敷の端の方に転がされたりしている。

そして僕は、一番右端のテーブルから幹事と二人でこの喧騒を眺めている。先程まで想像していた落ち着いた雰囲気はどこにもなかった。

「みんな元気だな」

トリカワを食べ終わり、ビールジョッキを手に持った幹事がポツリとつぶやいた。

「なんで幹事はそんなに年寄り臭いんだ」

「君たちクラスメイトにいたわりの心が足りないから

さ」

幹事はさういうと一気に残りのビールを飲み干した。

「だいたいもう後半かもしれないうちに就活が始まるっていうのに、みんなが高校生の頃とあんまり変わってなくて俺はちよっと、いや結構心配だぞ」

幹事の一言が少し心に響いた。

「特に敦也、お前のことだよ」

きちんと追撃もされた。

「就職は」

「就活もそうだが、恋の方が特に心配だ」

きちんと止めを刺された。

「今日のお前も隙あれば一番奥の席のあの人が見てたぞ」

その上死人にムチ打つような仕打ちを受けた。

「まったく話しかけるくらいすればいいのに」

「うるさいな、幹事だって大学中に彼女なんてできなかったじゃないか」

僕だっただけに一方的に言われるままではない。

「さういやさうだったな」

さういうと幹事は店員呼び出し用のボタンを押した。

すぐに若い店員がやってきた。

「烏龍茶を二つ。俺のは熱いのを下さい。敦也、ラストオーダーだけ何か頼むか？」

「烏龍茶だけでいい。僕の方は冷たいので」

「かしこまりました」

店員はさっさと厨房へ帰って行った。

僕の仕返しは露骨にそらされた。

「もう後十分で店を出ないといけないけど、いいのか、彼女に話しかけなくて？」

「いいさ、どうせ彼女とは同じ大学なんだ」

僕は少し投げやりにそう言った。

「そうか」

幹事もそれっきり口を閉じた。

「烏龍茶になります」

僕たちの前に烏龍茶の入ったグラスが二つ並べられた。お互いそれを手にした時だった。

「ねえ、幹事に敦也それ頂戴。酒飲み過ぎて喉カラカラなんだよね」

僕たち二人が座っている長テーブルの下を無理やり

くぐり抜けて、僕たちの間から顔を出してくるヤツがいた。僕と幹事が無言で見下ろすと、顔が真っ赤でかなり酔っていることが分かった。

僕は額に烏龍茶の入ったグラスを置いた。

「え？」

素つ頓狂な声をあげた。

「おい、敦也。俺の置くところはどこだ」

「瀬川、もう少し前に出てくれ。そしたら幹事がグラスを胸辺りに置ける」

「待つてよ、ひどくない？」

瀬川は額のグラスを落とさない様に必死にバランスを取っていた。器用なヤツだ。

「人にモノをもらう時の態度をわきまえないバカにはお灸が必要だと思つてな」

「おいおい敦也、そのグラスは冷たいからお灸にならないよ。こっちの方がお灸になるぞ」

幹事はそう言いながら熱い烏龍茶の入った湯呑を持

ち上げた。

「こんな子供っぽいことするあんたらにオレはお灸をすえたいよ」

瀬川が何か言つてはいるが、仰向けで額にグラスが乗っている状態では何を言つてもちつとも迫力はない。

「額にグラスを乗せている人から子供っぽいと言われ
てもな」

「敦也、あんたが乗せたグラスだろう」

「お、九時だ。みんな、楽しんでるところ悪いがもう時間だ。この後は各自それぞれ二次会で楽しんでくれ」
幹事の声でクラスメイト一同が各々帰る準備を始めた。きつちりしたやつはすぐに立ち上がり店を出ていくが、深酔いしたヤツや時間にルーズやヤツは今からのそのそと出て行く準備を始めている。

幹事は事前に集めた飲み会代の入った封筒を取り出すと、僕と瀬川をグラスと倒さない様に上手にまたいでレジへと向かった。

「瀬川その烏龍茶やるよ。額に乗ってけすごく愛着があ

るみたいだし」

きつちりしたタイプである僕はさっさと店から出ることにした。

「おい、グラスをどけてから行つてくれ。こぼれたらどうする」

「それだけ大声出してもこぼれないなら大丈夫さ」

僕は立ち上がり、靴を履いて座敷から出た。

「お前ホントにひどいヤツだな」

店を出る前に瀬川の方を見てみると、無事にグラスの中身をこぼすことなくテーブルに移していた。

店を出てしばらくすると、みんな二次会に行く者同士で集まりだした。

僕はそれとなく『彼女』を探した。別に彼女のいるグループに混ざろうというわけではない。

それに今さら入りにくい。ただ、彼女がこれからどうするか知りたいというだけだ。

『彼女』は簡単に見つかった。僕と同じようにみんな

から一步離れた居酒屋の看板の近くにいたからだ。

ただし、『彼女』は僕と違い少し上の方を見つめていた。

僕もそつちの方へ視線を向けてみた。

別に変哲もない雑居ビルがあるだけだった。麻雀と書かれた黄色い看板が光っている。

「はい、みなさん今日はお疲れ様でした。つもる話もあると思いますがこんな繁華街の中だと迷惑なので各自の二次会で続きをお願いします。それでは大学院に進む人は勉強を、公務員を目指す人も勉強を、就職する人は就活をがんばりましょう。以上短いですが幹事からの挨拶とさせていただきます。それでは解散」

幹事は店から出てくるとテキパキと解散の挨拶を済ませた。同時にみんな各グループごとに移動を始めた。

どのグループも高校の頃からつるんでいた者同士で、メンバーに大きな変化はなかった。

ただ一つ例外がある。高校生だった頃にクラス公認のカップルだったクラスメイトが一組残らず別れていたことだ。僕のクラスには三組のカップルがいたが三組と

もた。

高校のカップルなんてそんなものかもしれないが、それでも元恋人同士がお互いに声もかけない光景はなかなか嫌なものだった。

いや気分を頭から追い出すためにまた『彼女』を探した。けれど、彼女は先ほどまで立っていた看板の側からすでにいなくなっていた。探そうにも皆が移動を始めて、サラリーマンや他の大学生の雑踏の中に紛れて見つからなくなっていた。もし『彼女』が他のグループの、女子だけでなく男子も混ざったグループの中にいたら。そう考えるとさっきまでの暗い気分が一層重たいものになってきた。

「敦也はこれからどうするの？」

声の方を見ると休み時間によく話していた連中三、四人が僕に向けて手を振っていた。普段の僕なら迷わないで参加するが、今日はそんな気分にならなかった。

「いや、敦也はこれから俺と就活するもの同士でお互い励ましあってくるとよ」

幹事が僕の肩にポンと手を乗せながらそう言った。今の僕にはありがたい提案だった。

「就活勢は大変そうだな。理系なら俺らみたいにそのまま大学院まで進めばいいのに」

「理学部や工学部なら間違いなくそうしたさ。でも俺ら二人は情報学部なんだ」

幹事は少し残念そうにそう言った。

「ふーん、まあ頑張ってくれや」

気の抜けた声でそう言いながら、彼らは僕と幹事を残して楽しそうに雑踏の中に消えていった。

「ありがとう、幹事。正直助かった。今の気分で二次会とか行っても楽しくないし、他のみんなも気分が冷めると思う」

僕は素直に礼を口にした。

「どういたしました。でもたまには礼を行動で示してくれるとありがたいな。昔から敦也からの礼は結構聞いてきたからな。なんか俺に幸運の一つでも運んできてくれよ」

そう言う幹事の顔は少しにやついていた。

「幸運ね。僕に恋の橋渡しとかは無理そうだよ」

「別に恋だけとは限らないさ。例えば敦也が宝くじで一千万くらい当てて、それでどこか旅行に連れて行ってくれるとか」

「そんな機会は当分来ないだろうな」

「わかんないぞ。人生何が起こるなんか。敦也が少しでもやる気起こせば鈴谷だって振り向いてくれるかもしれないぞ」

幹事は一層にやつきながらポケットから財布と取り出し、お札を数えていた。

「じゃあ、行くか？」

予算を確認し終えた幹事はそういった。

「行くつてどこへ？」

「決まっているだろう。俺たちの二次会だ」

僕は少し戸惑った。

「えっと、本当に行くの？」

「当然だ。嘘はいかんからな」

既に幹事は歩き始めていた。

「それに、敦也の恋愛兼就職相談は本当にしないといけないからな」

「わかった。付き合うよ」

幹事の後に続いて歩き始めた。

「オレもついていくよ。就職とかすでに消防士として社会人三年目のオレの出番でしょう」

いつの間いたのか瀬川が僕に後から抱き着いてきた。アルコール臭い息が耳の裏あたりから襲ってきてこの上なく不快だ。僕は無言で軽く肘打ちを入れているが、瀬川は痛覚まで麻痺しているのか上機嫌だった。

「ねえ、仕事のことでも恋愛のことでもオレが相談に乗るよ。こう見えても社会人だし」

気味の悪い猫などで声を出しながら瀬川は僕にさらに体重をかけてきた。

「幹事、この酒臭いアホを引きはがしてくれ」

「やだ、離れない」

瀬川は両腕を僕の脇腹にからませてきた。

「瀬川、男の腰なんて撫でまわしても全く楽しくもないだろう」

幹事は困った顔をしながら瀬川を引きはがしてくれ
た。

「こいつ社会人としてちゃんと生活しているのかな。下手したら僕らより学生気分が抜けていなぞ」

毒づく僕らのことも気にならないのか、引きはがした瀬川は今度は幹事からみ付こうとした。

「うわ」

瀬川はからみつく前に幹事から突き飛ばされた。

「ひどいよ」

わざとらしくハンカチを目に当てて泣くマネを始めた。

「少しおかまっぼいのがすごく癪に障るな」

幹事は苛立ちを隠すことなくそう言った。

「こんだけ酔っているやつを店に連れて行くと迷惑だ。幹事、タクシーに押し込んで瀬川の家まで搬送しよう」

僕が辺りを見回すと数台のタクシーは簡単に見つか

った。

「敦也、瀬川の財布からこいつの送り先の住所がわかったぞ」

幹事は瀬川の財布から免許証を取り出してそう言った。

「ふたりとも人を荷物みたいに扱わないで」

瀬川はふらふらと立ち上がりながら気の抜けた声で抗議してきた。

「僕は瀬川を荷物とは思ってないよ、『お荷物』と思っているんだよ」

僕と幹事は二人して瀬川をタクシーに押し込んで素早く住所を伝えて出発してもらった。運転手はとてつもなく迷惑そうな顔を浮かべていた。

「せめて瀬川が女の子だったらよかったのかもな」

幹事は小さくなっていくタクシーを見つめながらさうつぶやいた。

「たぶんそれでも嫌だと思うよ」

僕は素直な感想を口にした。

「そうだな。さて問題は解決したし、俺らも行くか。なかなかいい飲み屋見つけたんだ。全席に仕切りがついて横の席の人の顔も見えないし、値段が少し高い分大学生が少ないから静かでもいいぞ」

「そうか、案内してくれ」

僕らは二人きりの寂しい二次会にむかった。

「いっぱい酒飲んで嫌な気持ちを忘れることにするさ」

「酔ってもいいけど騒ぐなよ」

「大丈夫、結構飲んできたからわかるけど、俺ってなかなか酒に強いみたいだ」

この日僕は初めて二日酔いを経験するほどまで酒を飲んだ。いや、飲んだというか飲まれたという方が正しい。

そして、この夜のことですべて僕の大学三年生のひと夏は大きく変わる事になった。

面倒見のいい男の話

俺が敦也との二次会を予定していた店は『夕顔』という名前の店である。日の出ている時はカフェ（この時は『朝顔』という名前である）、日が沈んでからはお酒を飲ませてくれる店だ。

店はそんなに広くなく、カウンターに七人、四人掛けのボックス席が三つの小さな店だ。少し高いが学生、サラリーマンを狙った居酒屋にない落ち着いた雰囲気。俺はたまらなく好きだ。

俺たちが入った時はカップルが一組ボックス席にいるほかにカウンターにカバンが一つあるだけだった。店内に曲名は知らないが、如何にもバーっといった感じの曲が流れている。

そんな店で俺は非常事態に陥っていた。問題は大きく分けて二つある。どちらも原因は極めて明確だ。しかし、解決は極めて困難だった。

「聞いてくれるのか幹事？」

まず一つ目の問題は目の前にいるすっかり悪酔いしてしまった敦也君だ。

「僕とれ、『彼女』はね……」

テーブルには酒の肴の卵焼きとスライストマト、そして空になったグラスが三つもある。どれもハイボールが入っていた。

そして、彼の手には俺から奪い取った梅酒のグラスが握られている。

「かんし。きいているか？」

消え入るような声で敦也が俺に問いかけてきた。人を医療器具と間違えないでほしい。

「聞いているさ。そつちこそ俺の声が聞こえているか？俺は幹事だぞ」

本名は山下高弘だけどな。

「適当な返事ならいらいさ、かーじくん」

さつきまで小さかった声我突然大きくなった。さつきから声の大きくなったり小さくなったりしている。こんな具合で面倒くさい酔い方をしている。

「いや、きちんと聞いていますよ。敦也君」

正直敦也がここまで深酔いしているのを始めてみた。最初は弱いカクテルを飲んでいただけだったが、『彼女』への恋心をどうするのか、と思ひ切り聞いてみた。これまでの敦也だと少し居心地の悪そうな顔して話をそらすくらいしかしてこなかった。

「僕は『彼女』が好きだよ。高校生の頃から。かんしくんは、とっくに知っていることだろう」

敦也は一見落ち着いているようにさつきからずっと暴走している。アルコールでほぼ自制心が溶けかけている。『彼女』の話をずっと繰り返している。しかも、どれも似たような話だ。一体どれだけこいつは進展がないんだ。

距離的には高校生の頃より少し近づいただけではないか。いや、毎日話しかけることができるようになっただけでもすごい進歩なのかもしれない。

「そんだろ？ がんばくん。おいおい、聞こえていきますか？」

でも、よくよく考えるとそんなことで喜んではいけなない。こいつは『彼女』と二年以上同じサークルにいるのに一緒に遊びに行ったことは一度しかない。ちなみにその一度とはサークルの歓迎会だ。

「聞いているって。彼女との関係だろ」

敦也の呂律はさつきからめちやくちやだ。しかもアルコールのおかげか少し気が強くなっている。

この一つ目の問題は時間と水でアルコールを流すしかない。

さて、ここから二つ目の問題だ。

「なあ、敦也」

「ろした」

酒臭い返事を返してきた。

「いい加減覚悟を決めたらどうだ」

俺は少し語尾を強めながら言った。敦也が『彼女』との関係を進展させるように説得する。このためにわざわざ二人で二次会に来たのだ。敦也を焚き付け、いい加減決着を着けさせる。

「覚悟は、とうの昔に、決まって、いる、よ」

敦也の返答にはどう考えても覚悟のひとかけらも含まれていなかった。目線を思いっきり下げ、グラスを握っていた手を放してテーブルの下にやっている。

「だったらまずは『彼女』なんて言い方をやめてちゃんと好きな人を名前と言ったらどうだ。てゆーか自分が言わないだけならまだしも、周囲に言われても恥ずかしいって。お前は小学生か」

俺の一言がかなりむっと来たようだ。

「バカにするな。ちゃんとと言える。る、ふる、古森水奈さんだ」

言い終えると敦也は一気に梅酒を飲み干した。

「そうだな。水奈ちゃんだ」

「随分と親しげに呼ぶんだな」

酔って緩んでいた敦也の目が鋭くなった。

「いやいや、敦也も本人から下の名前で呼んで欲しいと言われているだろう」

「は、恥ずかしいし」

本当にこいつは大学生なのだろうか？

「それに恋人になつてから水奈ちゃんって呼んだ方が、何かグツとくる」

「今言ったことの方が水奈ちゃんって呼ぶより何倍も恥ずかしいことだと思ふのだが」

「え？ そうかな」

まあ、今はそんなことはどうでもいいことだ。

「そうだよ。それよりも問題は敦也の片思いもそろそろ期限切れが近付いていることだ」

「片思いに期限なんてないよ。僕はそんなに惚れっぽい男でも軽い男でもないんだ。水奈さんに対する僕の気持ちはそう簡単に切れるものではないよ」

今の言葉を録音して酔いがさめた後の敦也に聞かせてやりたい。そうしたら二度と深酒なんてしないだろう。

「俺が話しているのは敦也の心の問題じゃないよ。心の中でなくて外の問題だ。就職して水奈ちゃんと離れてしまったらどうしようもないだろう」

敦也は黙って俯いている。

「流石に就職先まで同じにするわけにはいかないだろう。それは難し過ぎる」

まあ、彼女は確か大学院に進むと言っていたから敦也も院に進めばもう二年長く彼女と過ごせるのだが、それは根本的な解決にならない。

「幸い、水奈ちゃんにアタックしている男は現在のところいない」

確かに彼女は美人だけど、かなり変わっているからな。と余計な続きは心の中に伏せた。

「だから、大丈夫だ。誰かと彼女を取り合うなんてことはない」

「なあ」
やっとな敦也は反応してくれた。

「少しはやる気が出たか」

「水」

俺は直接カウンターにまで水をもらいに行った。

「若いからって飲み過ぎはダメよ」

そう言いながら店長はキンキンに冷えた水が入った

グラスを二つくれた。

「ほらよ」

敦也はグラスを受け取ると一気に飲み干した。俺も一気に飲み干した。

「落ち着いたか？」

「ちよつとだけ」

今日はこのまま敦也を焚き付けるのは無理かもしれない。酔い過ぎである。

「店に迷惑になる前に帰るか」

敦也は先ほど飲んだ梅酒で限界が近いようだ。

「うん」

俺と敦也は立ち上がった。敦也はふらふらしているが千鳥足というほどでもないし、ちゃんと財布から五千円札を出して俺に渡すことができた。

「店長、会計お願い」

「はいはい」

会計を済ませて店から出ると、熱気のもった空気に包まれた。七月の夜は酔い覚ましにはならない。

俺と敦也は特に話すことなく歩いてた。敦也は俺の後ろを歩いている。

この街は田舎ではないが一時を過ぎててもバス、電車があるほどでもない。公共交通機関を使いたければ二次会に行かず帰るしかない。

俺も敦也も市街地から歩いて一時間ほどのところに実家がある。敦也は酔っているし、家まで送った方がよいのだろうか？

「なあ、幹事」

市街地から少し離れたあたりで敦也が声をかけてきた。

「どうした？」

「協力してくれるか？」

「敦也が本気でやるならな」

敦也は歩調を速めた。俺を追い抜いてどんどんと先に進んでいく。やがて立ち止まった。

「どうするんだ？」

立ち止まった敦也に追いついた俺は敦也の肩に軽く

手を乗せてそう問いかけた。

「頑張らないといけないよな」

敦也の体は少し震えていた。

「そうだな」

俺は敦也を後押しするようにそう言った。

「わかったよ。勇気だすよ。でも、さっき言った通り協力してくれよ」

「大丈夫、きちんと協力するさ。そうと決まれば作戦会議だ。俺のパート行くぞ。作戦会議だ。でも深夜だから大声は出すなよ。それと今日のことは酔っていたからなし、と言ってもダメだからな」

「ああ、幹事頼りにさせてもらうぞ」

「そうだ、やるぞ。なんだって敦也、お前はもう引き返せないところに立っているんだからな」

「うん、もう今年の夏を逃すと後は就活と卒論に追われるだけのが大学生活しかないからな」

俺は敦也を任んでいるアパートまで引っ張って行った。今のやる気を逃がさないためにだ。

そして、これからひと夏の間、俺は想像もしなかったことに手を焼くことになる。

ところで、敦也は取り返しがつかない理由が今年の夏が恋を実らせるラストチャンスだと思つたようだが、実は違う。いくら俺でも言えないさ。敦也が水奈ちゃんへの恋心を暴露している途中で、店のカウンター席に水奈ちゃん本人がいたことに気が付いたなんて。しかも明らかにこちらの話題に気が付いて慌てて出て行つたなんて。

自由奔放な女の話

それは突然でした。私は突然に女将の卵焼きが食べたくなつたのです。

でも、まだ高校の同級生同士で『就活応援飲み会』をやっている途中なのです。しかし、三十分ほどで飲み会は終わります。ここは大人の女としては場の空気を読み、我慢の一択です。

しかし、どうしましょう。私は我慢するとじつと黙つてしまうという癖があります。そのまましていると流石にお互いがある程度知つている同級生です。仲の良い女の子たちが私の変化を敏感に察知します。すごいです。彼女らは私のことだけでなくいろんなことを敏感に察知します。

誰が誰を好きだ、あのカップルはうまくいってないなどなどをすぐに見破ります。

無論私だつて露骨に悪ければわかります。彼女らほどすぐには分からないというだけです。

しかし、彼女たちの言うことを信用しているというわけではありません。彼女たちの言うことが結構外れていること知つているからです。

そう、今まさにこの瞬間も間違えているからです。彼女たちは私が黙つた理由をクラスメイトの男の子の一部が飲み会開始からずつと私の前の席から動かないからだと判断しました。でも、私が黙つてしまつた理由は卵焼きが食べたいのを我慢しているからなのです。

彼女たちは私が男の人が苦手と何故か思っているのです。むしろ私は記憶があるより前に母をなくして、手ひとつで育て上げられたためか女の子の方が不思議だと思ふことの方が多くあるのです。

追い払われた男の子は少し不憫です。いや、もうクラスメイト達も成人しているので男の子というとかわいそうな気もしますが、高校時代を知っているせいでしょうか、男の子としか感じません。まあ、一人二人の例外はありますが、それはそれです。

「水奈ちゃん、相川君絶対水奈ちゃんを狙ってるよ。気を付けて」

「うん」

「ご心配なく私はそんなに安い女じゃありません、と言つてみたい気持ちもありました。けれど今口にしてもかっこよくなさそうなので別の機会に使うことにします。

それにしても高校の同級生も大学で一番の友達の愛子ちゃんもしよっちゅう私に向かって男の人に気を付けて、と注意してきます。

私はそれほどに惚れやすそうに見えるのでしょうか？

もしそうなら心外です。私は今まで好きな人の欄に『お父さん』としか書いたことはありません。

「そうだ、西村は？」

「おや、私が少しボーっとしている間に別の話題になったみたいですよ。」

「敦也君がどうしたの？」

「いや、西村つて絶対水奈に惚れているからさ」
「そう言えば、女の子たちはみんな同じことを高校の時から言っていました。別に信じているわけではありませんが。」

「どうしてそう思うの？」

「今まで問いかけたことがなかったので一度聞いてみることにしました。」

「いや、だつてさ、なんとなくわかるじゃん」

「周りの子全員が頷いています。」

「もし、本当にそうならば、私と彼が同じクラスになっ

たのは高校二年生の時です。その時からだと考えるともう四、五年近く私のことが好きだということになります。「でも、水奈の好きになる男なんて想像ができないな。どんな超人だろう？」

「うーん」

私は返事に困ったので明確に答えませんでした。するとみんないろいろな案を出し始めました。中には億万長者やスポーツ選手、芸能人など現実離れた案を出す子もいます。この不景気の世の中、そんなに良い玉の輿が転がっているわけないと思います。

それに私だって好きになった男の人くらいちゃんといます。

お父さんです。一人娘なので大切にされていると自分でも自覚できる程大切にされてきました。

だから、一人暮らしをするときも説得が大変でした。「ところで、水奈はこと後の二次会どうする？」

私はこの後に女将の卵焼きを食べに行くのです。そのための断る口実を探している時でした。

「はい、みなさん今日はお疲れ様でした。つもる話もあると思いますがこんな繁華街の中だと迷惑なので各自の二次会で続きをお願いします。それでは大学院に進む人は勉強を、公務員を目指す人も勉強を、就職する人は就活をがんばりましょう。以上短いですが幹事からの挨拶とさせていただきます。それでは解散」

幹事くんが退出の号令をしてくれました。チャンスです。今のうちに一人で抜け出しましょう。

でないと二次会に強制連行されるのが、目に見えています。最後に店の外で幹事くんの挨拶を聞こうか迷っていましたが、なんとなく上を見ると黄色い看板が目に入ってしまった。卵焼き、もう我慢の限界です。早速し出発しましょう。

私は足早に繁華街のアーケードの端の方にあるバー『夕顔』に向かいました。店に入るとボックス席に一組のカップル、カウンターには誰もおらず、女将がグラスを磨いていました。

「女将、いつもの」

私はそういうとカウンター席に座りました。

「女将じゃないわ。店長よ」

いつものようにそう言うのと店長は卵を冷蔵庫から取り出しました。

「ちよつとお花を摘みに、女将飲み物は冷たいもので」
コトを済ませ、帰ってくるテーブルにはアツアツの卵焼きとビールが置かれていました。流石は女将、きちんとわかっています。

さつそくいただきます。女将の卵焼きは塩で味つけがしてあります。これがまたいい具合にビールと合うから困ります。

「たまには男の子でも連れて来ればいいのに。こんな美人ほつとくなんて最近の子は何しているのかしら」

そして、この女将は私の女としての目標でもありません。さりげない仕草の中に隠された色気、話し方など女の私でも見惚れてしまいます。母がいない私にはそういったモノを学ぶ機会がなかったのです。今女将から学んでい

る最中です。

「後ろの男の子たち恋の話をしているわよ。微笑ましいわ」

女将の視線を辿るとそこには見知った人がいました。同じ高校出身で同じ大学に通い、同じサークルに所属しています。片方は幹事くん、そしてもう片方は西村敦也くんです。

恋の話と聞いて少し興味がわきました。先程の飲み会で敦也くんは私のことが好きだと噂されていたことを思い出しました。これはチャンスです。その噂が本当なのかどうか確かめましょう。

私は二人に近づくために席を移動しました。

敦也くんの声は大きくなったり小さくなったりして安定しませんが、好きな人の話をしていることはわかります。なかなか大きな声で『彼女』

のことを話しています。でも『彼女』では誰の事なのか分かりません。

それが少し残念です。幹事くんは大変そうです。敦也

くんをなだめたり、お酒を取られたりとお酒を楽しむ余裕はなさそうです。

「敦也くんは誰のこと好きなんだろう？」

私の小さな呟きを女将は聞き逃しませんでした。

「ねえねえ、あの男の子たち水奈ちゃんのお友達なの？」

だったら混ざってくればいいのに」

小声で話しかけてきた女将はなぜかすぐく楽しそうです。ニコニコしています。

「同じ大学の、同じサークルの男の子です」

別に隠す理由はないので素直に教えました。

「あら、だから水奈ちゃん気になってるのね」

その一言で私はハッと気が付きました。そう言えば、さつきから二人の会話を聞いていましたが、これは盗み聞きです。一人前の乙女がするのはちよつとはしたくない行為だということです。

途端に私は恥ずかしくなってきました。残り少ない冷めた卵焼きをビールで流し込むと女将に代金を渡して、店を出ることにしました。

帰り道を歩いている間、家に帰ってお風呂に入っている間、そして今のベッドに寝転んでいます。ベッドの上でジタバタしても私の頭から離れないことがあります。

「敦也くんの好きな人は誰なのだろう？」

考えてもどうしようもないことですが、考えてしまうことは仕方ありません。

しかも考えても考えても、解決の糸口さえも見つからないことなのです。

こうなったら解決策は一つしかありません。考えて無駄なら行動あるのみです。何をするか分かりませんが、そんなものは明日の朝にはきつと思いついています。

この時の私の決心がこれからのひと夏を大きく変えることになってしまった。

片思いをしている男の夏

僕はサークル室から出て、一人で帰っていた。日は暮れているが夜になっても熱いままだった。足は進んでいるが、僕の頭は同じ考えがずっとぐるぐる回っている。

考えることは一つだけだ。昨日の飲み会後の幹事のアルバイトで行われた作戦会議のことである。酔っていた僕は瀬川まで呼び出してしまった。作戦会議というか決起集会みたいな状態になってしまった。作戦名を決めようのだ、断られることを前提で慰め会の準備をしようだの、なんでここに集まった男三人全員に彼女が一度もできなかったことないんだよ、などなど主に瀬川が騒いでいた。そんな状態で決まったことは一つだけ。それは幹事がメールで送ってきてくれた。

ステップ1 今週中に古森水奈をデートに誘ってみよう

これ一つである。

「この扱いはあんまりだろう」

小学生に出された宿題じゃないんだ。このメールをもらった月曜日にそんなことを思いながら軽い二日酔いのなか大学に向かっていた。

今は携帯を開いて月曜にもらったこのメールをもう一度見ている。メールボックスを閉じて画面の上部を確認してみた。

そこには水曜と書かれていた。何もできないまま月、火曜と二日を無為にしてしまった。

この状態では小学生扱いされてもまともな反撃はできない。

「はあ」

ため息がこぼれた。僕だって何もしなかったわけではない。僕と水奈さんは同じサークルに所属している。名前は冷血動物愛好会だ。もともとは爬虫類同好会だったが、カエルなど爬虫類以外の生き物も飼育されているという理由で今の名前になった。メンバーは僕、水奈さん、幹事、そして去年から入ってきた水奈さんの友達の富田

愛子という女の子の四人である。

活動というほどの活動はしていない。水奈さんは観察日記をつけてレポートにまとめているが他のメンバーはゲージの掃除ぐらいしかしてない。顧問の教授が飼えなくなったスツポンモドキというカメを飼育する代わりにサークルとして承認してもらおうという荒業で設立されたサークルである。現在飼育ケースは四つある。

一つは顧問のカメ、一つはボールパイソンという派手な柄のへび、一つはプレコという熱帯魚、ナマズの仲間らしい。そして愛好会名物『マタマタ』が最後の飼育ケースに住んでいる。このマタマタが彼女の最もお気に入りである。

ちなみにこの四匹の中で彼女のペットはプレコのみで、残りは世話してくれると聞きつけた教授の知り合いの皆さんが連れてきたのだ。どのペットも奥さんが気持ち悪がつて家庭の不和の原因だったらしい。ここなら安全というわけだ。

そんなサークルだが水奈さんに惹かれてここに来る

やつは結構多い。だか騒ぐと生き物によくないと水奈さんに怒られ追い出されるか、恍惚の表情でへびにエサをやる水奈さんに驚いて出て行くかのどちらかである。

そんなわけで、今の四人にメンバーが落ち着いたわけである。僕と幹事と富田さんは黙って勝手に持ち運んだ将棋や囲碁を楽しんでいる。簡単な世話とエサなどの買い出ししかできることがないからだ。

サークル部室（僕は飼育部屋と呼んでいる）はいつも人が少ない。水奈ちゃんは夕方には毎日いるが、幹事は週に二、三回しか来ないし、富田さんは来て一局囲碁をうって帰ってしまう。僕はほぼ毎日来て、なんとなく居心地が悪くなるまで、することがなくてもずっという。

つまりは僕と水奈さんはここで二人きりになることが割とあるということだ。もちろん利用したき。今日のサークルで思いきってデートに誘おうとしたき。でもな、出なかつたんだよ、声が、デートという一言がいえなかつたんだよ。

そんなわけで僕は幹事のアパートに駆け込んだ。幹事

は快く家にあげてくれた。麦茶とカップ麺がだされた。

「敦也、うまくいった。いやそんな顔じゃないな」

「デートに誘うってどうすればいいんだ？」

僕は単刀直入に本題を切り出した。

「そんなの俺に聞かれても、俺も恋人なんて作ったことないぞ」

幹事は淡々と答えた。

「とりあえず、どんな状況で誘うのに失敗したのか教えてくれ」

僕は幹事にサークルで彼女を前にして何も言えないまま撤退してここに逃げてきたことをそのまま伝えた。

「なんか誘い方以前の問題な気がするぞ」

ずばりと言われた。まあ、僕の行動は第三者から見ると何も言わないで突然サークルから帰った人でしかないから仕方ないことだ。

「水奈ちゃんと話すことはこの二年で慣れたはずだろう」

幹事は呆れたようにそう言った。

「しかし、今まで一度も口にしたことのないことを言うんだぞ。自然にふるまえるわけないさ」

「そうだな」

そう言うのと幹事は黙り込んだ。僕もどうすれば臆せず水奈さんを誘えるか考えた。ついでにポットからお湯をカップ麺に注いだ。

三分たつて食べようと割り箸に手をかけた時、幹事が口を開いた。

「メールで誘えばいいんじゃない？」

「でも、大切なことだし、口で直接誘った方がいいんじゃないかな」

「変なところで律儀だな」

幹事は自分のコップに麦茶を注いだ。

「メールで遊びに誘うくらい普通だろう？」

「遊びに行くんじゃないかってデートだよ」

「それだ」

幹事はパチンと指を鳴らした。

「デートに誘おうと思うと緊張するなら遊びに誘おうと

「思えばいい」

「それは言葉のあやだよ」

「なんでもいいんだよ。とにかく敦也が緊張しないで誘えることが大事なんだ」

「そう言う」と幹事は麦茶に口をつけた。僕も黙ってカップ麺をすすっている。

「メールが嫌ならば、もう俺にアイディアはないぞ」

「幹事は突き放すようそう言ってきた。今日のことをもう一度振り返ってみる。今週中に水奈さんに面と向かってデートに誘っている自分を想像できなかった。」

「わかった。メールで誘おう」

僕は幹事のアドバイスを受け入れた。

「どんな風に誘えばいいんだ？」

「安心しろ俺も一緒に考えるさ」

「こうして僕と幹事は二時間ほど一生懸命メールの身を推敲した。」

「できるだけ遠回しに誘うようにつとめ、押しつけがましくない様に言葉を慎重に選んで行った。内容だけなら

いたってシンプルだ。日曜日に一緒に出掛けようというだけだ。

「できたことはできた。良いできか、悪いできか分からないが、とりあえずは完成した。」

「どうしても自分で送る決心がつかなかったから送信ボタンは幹事に押しもらった。」

「後は返事が返ってくるのを待つだけだ。そう、待つしかないのだ。」

「頼む、一秒でもいいから早く帰ってきてくれ」

僕は両手をきつく結び点に祈った。

僕は大学の電光掲示板を見ていた。授業連絡や大学からの連絡が乗っている。一番上には「E」と書かれている。僕の記憶違いでなければこれは金曜日という意味であり、すなわち今週がもうすぐ終わるということを示しているのである。

携帯をいじり受信ボックスを開いた。上から順番に確認していく。水曜以降届いたメールを入念に確認してい

く。何度見てもやつぱり古森水奈から来たメールはない。その事実を確認したことでまた僕は目の前が真つ暗になりそうになった。ここが自宅ならばベッドに潜りこんで、そのままこの嫌な現実を夢にしたいところだ。でも、ここは大学だし倒れるわけにもいかない。

木曜日はサークルに行けなかった。幹事からは行くように言われていたがどうしても恥ずかしくて行けなかった。部室の近くを小一時間うろろして、結局中に入れないまま帰ってしまった。

今日も昨日と同じように帰りたい気持ちでいっぱいだった。自動販売機で買った缶コーヒーを片手にベンチに腰かけて時間をつぶすことにした。

座るとよくない考えばかりが浮かんできた。返事を聞きたいが、でも聞きたくない。できればあんなメールのことなんてなかったことにしていつも通りに接してほしい。いやいや、でも無視されてもそれだと僕が彼女の恋愛対象に入っていないということが完全に証明されてしまうわけであるし……

「何をしているのでしょうか？」

その一言が僕を現実に戻してくれた。同時に、緊張の極致に連れて行ってくれた。

水奈さんが目の前に立っていたのだ。

「敦也さん、サークルに行きませんか？」

彼女はいつもと変わらないようだった。

「はい」

僕は短く返事をするのと立ち上がった。それ以上会話が続かなかった。僕はいつもと同じように会話ができる精神状態じゃなかった。彼女と一緒にサークルへ向かっている。だがしかし、僕は彼女の横に並んで歩くことがどうしてもできず、その後ろに、いや三步離れてついていくといった有様だった。

「我ながら情けないにもほどがある」

「なにかありましたか？」

僕のささやきは彼女に聞こえていたようだった。

「いやいや、何でもありません」

僕はあわてて首を振った。

「そうですか。どうして私から少し離れているのですか？」

とてつもなく聞かれたくないことを聞かれてしまった。

「えっと、その、別になんでもないよ」

君に会うのが恥ずかしい、今の生殺し状態を止めてほしい。なんてことは言えない。

「そうなのですか」

彼女は素気なく答えると再びスタスタと歩き始めた。

「生殺しはまだ続くのか」

そんなに嫌なら今すぐ返事を聞けばいいのにと幹事や瀬川あたりなら言うだろう。

そんな勇気があるならもう解決している。遊びに誘うメールを送っただけでも誉めてほしいくらいだ。

そのまま会話もなく飼育部屋についてた。

水奈さんはいつも通りにペットたちの健康確認を始めた。僕は備え付けのイスに座り、爬虫類の専門雑誌を開いた。彼女が持ち込んだものだ。

幹事が富田さんがいれば囲碁や将棋で時間が潰せるのだが。この部屋では大きな音を出したり、光を出したりすると水奈さんに怒られるのだ。だからここにはテレビも何もない。時間をつぶすのはボードゲームくらいしかないのだ。だが相手がいなければどうしようもない。そんなわけで非常に気まずい時間を味わっていた。雑誌も何度か読んだものだし特に目新しさを感じず、いまひとつ集中できなかった。来たばかりで帰るわけにもいかない。

僕は雑誌を置くと、イスに深く腰掛けて目を閉じた。彼女は黙々とヘビたちの相手をしている音が聞こえる。プレコの水槽につながっている濾過装置のモーター音がやけに大きく聞こえた。

目を閉じるとここ二、三日の中で一番強い焦燥感を覚えた。一刻も早く解放してほしい。デートしてくれるのか、玉砕なのかきっぱりと示してほしい。玉砕なら幹事と瀬川がパーティを開いてくれる。そこであの二人に散々迷惑をかければいいだけだ。

ああ、叫びたい。このやり場のない気持ちをどうにかして発散させたい。受験の時もヤバいくらいストレスが溜まっていたが、今もそれに匹敵するかもしれない。

発散の方法自体は簡単なのだ。何度も考え付いたことだ。水奈さんに直接聞けばよい。でも二日返事をくれなかったのは、暗にお断りしますというメッセージなのかもしれない。それを察知できないでわざわざ本人に聞いたのだしたとなると彼女の中の僕の評価が下がるかもしれない。

僕はさっきのベンチで座っていた時と同じような思考の迷路の中をさまよっていた。

出口なんてものはない。水奈さんという女神様が救いの糸を垂らしてくれるのをただ待つだけだ。登りきった所に水奈さんが待つていてくれるか、途中で糸が切れるか僕には分からないが、放置されている現状よりはいい。目を閉じていてこんな風に考えてしまうなら、目を開いていればいいかもしれない。でも、そうすると彼女が視界に入ってしまう。そうなると一層心が乱されること

が目に見える。

結論が出た。今できることはこうして目を閉じて、できるだけ心静かに過ごすことぐらいだ。

「敦也くん起きてる？」

結論が出たとたんにそれを覆す必要にせまられた。

「起きているよ」

僕は目を開けて背もたれに預けていた体を起こした。

「明後日のことだけとお昼すぎなら時間あるよ」

明後日のこと？

「その時間からでいいかな？」

水奈さんの言っていることがじわじわと頭に沁みわたってくる。

「えーと、都合悪いかな？」

僕は彼女の言っていることを理解できた。

「時間ならあります。無尺蔵にあります」

「日曜日は無尺蔵にないと思うよ」

「ば、場所と厳密な集合時間を指定してください。全力で合わせます」

緊張から解き放たれた僕の心は混乱へと急降下していった。

「それなら時間は二時で、場所は駅でいいかな」

「はい大丈夫です」

僕らの住んでいるこの地方都市の木元市で駅、街といったらほぼ同じ場所で、それは一ヶ所しかない。木元駅とその周辺に広がる繁華街のことだ。僕らの飲み会も当然ここの辺りにある居酒屋の一つで開かれた。

遊びに行くときは駅集合といって集まった後は近くをぶらぶら歩きまわるのだ。僕には駅と街で場所が一ヶ所に絞れてしまうところに遊ぶところが少ない田舎町の悲しさが溢れていると思う。

「二時に駅ですね。しつかり脳に刻み込みました」

「そう、なら待っているからね」

「はい」

返事の後、僕はカバンを掴むと飼育部屋から飛び出した。

僕は水奈さんと出かける。いや、デートをする。その

ことが現実になったのだ。そのことが頭の中を駆け巡っている。先程まで焦りが嘘のように消えてしまった。

「そうだ。水奈さんはきつと僕の嬉しさを最大限にするために今日まで焦らしたに違いない」

僕は半ば本気でそう信じていた。

駐輪場まで駆け足で行くとバイクに飛び乗って走り出した。いつもより遠回して帰った。

デートに誘うことが成功したことを幹事と瀬川に伝えないといけないと思ったが、今日一日たっぷりこの幸せを独占したくて僕は明日になってから二人に連絡を入れることにした。

面倒見のいい男の夏

土曜日の昼前、クーラーのきいた部屋で二度寝を十分に堪能し、遅めの朝食の準備をしているとチャイムを連打された。俺は静かな休日を邪魔されたのでちよつとムツとしながら扉を開けた。

そこにはだらしのない笑みを浮かべた敦也が立っていた。

「暑さで頭がダメになったのか？」

「違うな、気温の暑さでなく恋の熱さでダメになったんだよ」

いい気分を邪魔された仕返しは無視された。ついでに頭がダメになっているという自覚が本人にあることも確認できた。

「デートができるみたいだなおめでどう」

俺は扉を閉めて料理に戻ろうとしたが、敦也は強引に家の中に入って来た。

「聞いてくれ。僕は明日デートなんだ」

「顔見ればわかるよ」

「そうか。では、僕はどんな服装で行けばいいんだ？
どんな気持ちで行けばいいんだ？」

これはかなり面倒なことになりそうだ。確かに協力するとは言ったが一から十まで世話するつもりはないぞ。

「いつもよりちよつと清潔さとかに気を配ってあげばいいんじゃないか」

「そんな、もつと具体的に」
俺にどうしろと言うのだ。

「前に一緒に夏物の服を買いに行っただろう。その中で一番気に入っているものを今から帰って、洗濯して、干して、明日来ていけばいいと思うよ」

敦也は不満そうだった。

「いや、初デートなんだ。もつとアクセサリーとか気を使った方がいいんじゃないか？」

「今まで着けてなかったのにいきなりつけてもな。それに敦也も落ち着かないだろう」

敦也はしゅんと落ち込んでいるようだ。

「いつもより身だしなみに気を使って、そして落ち着いて水奈ちゃんと楽しんでくればいいんだよ」

俺はゆっくり論すようにそう言った。

「大事なのはどんな服装をするかじゃなくて、敦也と水奈ちゃんが二人とも明日のデートをしつかり楽しんでいい思い出にすること。そうだろうか？」

敦也はまた笑顔になった。

「そうだな。幹事、その通りだよ」

とりあえず納得してくれたらしい。

「じゃあ、僕は準備をするから帰るね」

敦也は帰っていた。

「あいつこんなに単純なヤツだったかな」

まるで瀬川みたいだ。恋とはここまで人を変えるものなのだろうか。

もしかしたら自分にも恋人ができるかとあんな頭の軽い人間になるのだろうか？

理系に進学した宿命か自分の周囲には女の子がとことん少ない。親しい女の子は敦也の意中の人である水奈

ちゃんとその友達の愛子ちゃんくらいだ。この二人がお互いに名前で呼び合うほど仲がよい。高校のクラスメイトは大学に入った後は疎遠になっている。

とても恋の花咲く土壌があるとは思えない。

俺はその考えを捨てる静かな午後を楽しむことにした。

俺は呼び出しを受けて喫茶店『朝顔』に来ていた。もう五時だからそろそろ店名は『夕顔』になる。俺を呼び出したのは富田愛子ちゃんだった。

店に入るとボックス席の一番手前に座っていた。俺が座ると彼女は店長を呼び、コーヒーを二つ注文した。

「どうも、こんにちは。来てくれてありがとうね」

愛子ちゃんは爽やか笑顔で迎えてくれた。黒髪のポニーテールが左右に揺れている。

「なにかあったの？ 突然呼び出すなんてたぶん初めてのことだよね」

「ちよつと相談ごと、いや悪巧みの提案かな」

愛子ちゃんはにんまりと笑った。

「明日、敦也くんと水奈ちゃんがデートなの知っているよね」

俺に確認を取らないで断定してきた。

「まあ、知らないならそれはそれでいいけどね」

「知っているが、それがどうしたのか？」

アイスコーヒーが二つ運ばれてきた。愛子ちゃんはそれを一口飲むと話を続けた。

「実は水奈ちゃんから相談を受けたんだ。明日男の人と出かけるから心構えを教えてくれって」

心構えて、彼女も彼女で暴走していることがよく伝わってきた。

「そうなのか」

俺がつまらない返事をするとう愛子ちゃんの不機嫌さをアピールしてきた。

「もっと関心を持とうよ。同じサークルの仲間なんだから」

「関心を持ってどうするんだ？」

「二人の恋路を温かく見守るんだよ」

彼女はすこぶる上機嫌だった。彼女の顔を見ていると嫌な予感がした。

「もしかして、俺も一緒に？」

予感的中した。

「やめておこう。疲れるだけだ」

「いやいや、今こそ友達のために頑張ろうよ」

そんなこと言われても俺自身はここ最近の敦也への対応ですでにけっこう疲れている。

「明日頑張るか、今から疲れるか高弘君には選ばせてあげよう」

選ばせてあげようと言っているが内容は脅しだった。

「ちなみに今疲れるを選択するとどうなるの？」

「お酒を飲んで高弘くんからみまます。それはもうへびのように」

彼女の酒癖の悪さは昨年の忘年会で確認済みだった。正直女の子に目の前であんなことされるのはもう御免

だった。

「愛子ちゃんは俺のことを唯一本名で呼んでくれるサークルメンバーだからな。そんないい子の頼みを断るはずないさ」

我ながら調子のいいことを言っていると思う。

「ありがとう。高弘くんは頼りになるね」

「はは、そうかな」

「そうだよ。それじゃ早速作戦会議だ」

この後彼女の作戦会議が終わり、店を出るころには月がほぼ真上に差し掛かった頃だった。

俺たちは敦也たちが待ち合わせをしている駅の改札口付近が見渡せる駅の中にある本屋に集合することになった。それにしても大学生になってこんな野暮なことするはめになるとは思わなかった。

自由奔放はな女の夏

私は鏡の前で最終チェックをしています。寝癖など気の緩みを感じさせるものは一切ありません。

昨日愛子ちゃんが選んでくれた白のワンピースをバツチリきまっています。やっぱり勝負事には白ですよ。死に装束も白色ですし。

いつまでも身だしなみを整えているわけにはいきません。出発の時間です。寝坊をした時の保険のために、わざわざ待ち合わせの時間を午後にしてもらったのです。遅れるわけにはいきません。

気分は出陣です。

今日の目的はここ数日のあいだ私を苦しめている心のモヤモヤを取ることです。

原因はまだ詳しくわかりませんが、寝る前に考えたり、女将に相談したり、愛子ちゃんに相談した結果敦也くんが原因に関係していることはわかりました。女将は私のモヤモヤを一発で見抜いたと言っていますが教えてく

れません。女将は時々私をからかつて遊ぶので今回もそれでしょう。

待ち合わせの場所に着くまでにもう一度考えてみましょう。

駅に着くと既に敦也くんは私を待っていました。せっかくなので私が先に来て『待った』と駆け寄ってくる彼に『今来たところ』と言って見たかったですが残念です。それは次回にしましょう。

「つてそれではまるで恋人同士のデートではありませんか」

私の声が聞こえたのか敦也くんはこちらに近づいてきます。

今のを聞かれたらかなり恥ずかしいです。

でも気を取り直していきましょう。まだ始まったばかりです。確かめる時間はいくらでもあります。

結論から言いますと、時間はあつという間に過ぎてし

まいました。よくよく考えてみますと、私の心のモヤモヤを解決のために敦也くんと過ごして何を確かめるというのでしょうか。確かめる内容が具体的に決まっていなのではどうしようありません。

でも、敦也くんとの間がつまらなかつたというわけではありません。むしろとても楽しかつたです。敦也くんと過ごしている間はモヤモヤが治まっていました。

ぶらぶらと歩いている時、私行きつけのペットショップを見て回っている時、晩ご飯を一緒に食べている時と全て楽しいものでした。

普段の敦也くんは落ち着いた様子の人なのですが、今日は明らかにウキウキとしていました。私と過ごすことをこんなにも楽しんでくれるなら私も嬉しいのです。いつもより多く彼も笑っていたと思います。

こんなにも楽しい時間は当然あつという間に過ぎてしまいました。そんなにも多くのことをしたつもりはありませんが、気が付くともう夜の九時です。

敦也くんは私をバイクの後ろに乗せてアパートの前

まで送り届けてくれました。

「また明日、大学で」

そう言うやと行ってしまいました。楽しかったと一言伝えたかったのですが、後からメールで伝えましょう。

彼が行ってしまうとまた胸の中にモヤモヤが霧のように立ち込めてきました。

部屋に帰って電気をつけて、誰もいない部屋を見るとため息が出てきました。

すぐでもベッドに飛び込んで眠り、このモヤモヤを無理やりもみ消したいのですが化粧をおとしたり、明日の準備をしないといけないのでそうはいきません。

お風呂に入って体はさっぱりしましたが、心は全然さっぱりしません。どうすればよいのでしょうか。

私はよい考えが浮かばないまま無為な時間を過ごしました。タオルケットをぎゅつと抱きしめたりしてやるせない気持ちを紛らわしているうちに日を跨いで月曜日になっていました。

どうやら、明日は眠たい一日になりそうです。

片思いの男、決意編

僕が水奈さんとのデートを終えた日曜日から二日後、幹事から新しいメールが届いた。内容は渡したいものがあるから喫茶店『朝顔』に来いということだ。

今日は午前中で講義が全て終わるので待ち合わせ場所の喫茶店でサンドイッチでも食べながらのんびりと幹事を待つことにしようと思った。

けれど僕が喫茶店に入ると既に幹事がボックス席の一番奥に腰かけて僕を待っていた。

「敦也ここだ」

幹事はトーストを食べていた。

「店長、カフェオレとサンドイッチを下さい」

注文をした後で幹事の前に腰かけた。

「授業さぼったな」

「そうだ。だから後でノートのコピーをくれ」

幹事は僕の前に封筒を置いた。

「これは？」

「敦也の次の任務が書いてある」

そういうと封筒を僕の方へグツと差し出した。

手に取って中身を確認すると大きな紙が一枚折りたたまれて入っていた。

広げてみると『ここで古森水奈に告白せよ』と書かれていた。

封筒をひっくり返すとバスのチケットが二枚と木元天文台の入館チケットが二枚出てきた。この天文台は地元では有名なデートスポットの一つだ。市内から一時間ほどの山の中にあり、プラネタリウムと専門の望遠鏡で他の星を観察できることが自慢の施設だ。うちの大学の教授、生徒も研究のために利用していることがある。

僕がそれらをじっと見ていると幹事が声をかけてきた。

「そういうことだ」

「どいうことだよ？」

「言葉通りさ」

そう言いながらトーストをかじる幹事の態度に僕は

苛立ちを隠せなかった。

「たしかに僕は協力してくれとは言ったが、告白しろ、とまで指示されるとそれはだいぶおせっかいが過ぎると思うぞ」

「でも、こうでも言わないと結局のところ進展しないだろう」

幹事はきつぱりとそう断定した。

「バカにしないでくれ。告白のタイミングくらいは自分できちんとつかめる」

「そうかい。でも、先週水奈ちゃんを面と向かってデートに誘えず、メール一通送るのにも何時間もかかった人のセリフとは思えないね」

今日の幹事は露骨に嫌な態度を取っている。

「なにか言いたいことでもあるのか幹事」

「別にないさ」

絶対にあるだろう。声こそ出さないが僕は確信している。今更僕を手伝うのが嫌になったというのだろうか。確かに先週みたいに行動に移す前から幹事には実り

のないグチを何度なく聞かせてきたし、この前のデートの後も夜中に幹事の家を訪れて朝までその日のことを気のすむまではなし、迷惑をかけてしまった。

そう考えると不機嫌なのはわかるが、この態度はひどいと思う。

「そこに書いてあることが俺の言いたいことだ」

幹事は封筒を指さしていた。

「わかったよ」

僕は素気なく返事をする。チケットを鞆にしまって店を出た。

注文していたサンドイッチを食べないまま出てきてしまったが、今更戻るのも気まずいのでそのまま帰ることにした。

面倒見のいい男 点火編

俺は朝から喫茶店『朝顔』来ていた。愛子ちゃんから呼び出されていたからだ。彼女は僕に二枚のチケットを渡した。天文台のチケットとバスのチケットだ。

「これは何？」

「それを敦也くんにあげてほしいんよ」

俺がか？

「自分でしたら」

「幹事くんにはついでに敦也くんを思いつきり煽って焚き付けて欲しいんだ」

愛子ちゃんはそう言った。

「一応聞くけど、どうして俺が？」

「だって水奈ちゃんから誘うより敦也くんから誘ってくれた方がいいでしょう」

そういうものなのか。

「まあ、いいよ。ここまで手伝ってきたし、引き受けよう」

俺はここ最近諦めがよくなったと自分でも思う。

「焚き付けるって何をすればいいんだ？」

「敦也くんが水奈ちゃんに告白する決心をしてくれるように誘導してくれればいいのよ」

難題だった。

「それができれば俺は何年も苦労してないよ」

「だからもうひと頑張りしようよ。その苦労を断ち切るために」

愛子ちゃんは前向きだった。

「愛子ちゃんは何か秘策があるの？」

「あるよ」

まさかそんなこと考えているとは思っていなかったから俺は結構驚いた。

「どんな秘策があるの？」

「簡単だよ。高弘くんが敦也くんを焚き付ける。そして、私たちは二人の天文台でのデートを影から見守るのだ」

適当な秘策だった。

「最初の段階から最後の段階に至るまでの間にあるい

くつもの重要なステップが省略されているぞ」

愛子ちゃんはビシッと親指を立てた。

「大丈夫、高弘くんが焚き付けてくれるよ」
他力本願だった。

「じゃあ、早速敦也くんをここに呼び出そうか」

彼女の中でもう秘策のはスタートしているらしい。

仕方がない。俺も手伝うか。

俺は大きなため息をつき、敦也を呼び出すメールを送った。

自由奔放な女 準備編

先週に続いて、今週も嬉しいことがありました。また敦也くんから一緒に出掛けないかとお誘いがあったのです。

今度は天文台です。

今回行くところは山なので流石にワンピースはやめ、薄手のカーデイガンにジーンズと動きやすい服にしました。地味かもしれませんが、山に合いそうな服は持っています。

それにしても週末が楽しみです。今からそのことを考えるだけで心のモヤモヤが晴れていきます。

それにしても、敦也くんと私のこのモヤモヤ感には何の関係があるのでしょうか？

あと一歩、あと一歩で何かがつかめるのです。彼と何がしたいのか。それがわかる気がするのです。

焦る片思いの男

僕は激しく焦っていた。今日は土曜日で水奈さんと天文台に行く約束をしていた日だった。そんな大切な日だというのに今日に限って研究室の説明会があり、しかも

それが長引いてしまったのだ。

水奈さんからはもうバスが発射したというメールが届いた。僕はバイクで向かうからバス停で待っているように返信した。

僕は家に帰るとバイクに跨り、出発した。バスを逃したのは取り返しがつくが、プラネタリウムが始まってしまおうと途中入場ができない。僕は急いだ。

計算違いをした面倒見のいい男

俺は愛子ちゃんと共に天文台に向かうバス停にいた。もうすぐバスの時間だというのにまだ敦也は現れない。

とうとうバスが来てしまった。俺と愛子ちゃんは二人して乗り込んだ。

「なあ、もう予定が崩壊している気がするのだが」

俺は愛子ちゃんに問いかけた。

「大丈夫だって、きつと水奈さんは乗っているよ。敦也くんはバイクで来て現地合流するんだよ」

「そんな樂觀的に考えていいのかな」

俺が窓の外を見ると、水奈ちゃんはバスに乗らずバス停に残っていた。

「おいおい、水奈ちゃんバスに乗ってないぞ。どうする？」

愛子ちゃんは頭に手を当てこういった。

「あちゃー」

「ホントにアチャーだよ」

しかし、俺のツツコミは残念ながら水奈ちゃんに届かないのだ。

「まさかこんな結末になるなんて」

俺と愛子ちゃんは天文台の側の草原を歩いていた。

「その通りだな」

まさか、敦也が遅刻するなんてな。俺たちはここまで

何をしに来たんだろう。

「まあでも、一回遅刻したぐらい謝ってしまえば済むことだし、次回のデートを温かく見守ろうよ」

愛子ちゃんは明るくそう言ったが、俺は徒労感を拭うことができなかった。

「高弘くん、しっかりして」

「いや、意識はしっかりしているよ。ただなんかちよつと疲れてしまっただけだよ」

そう言うと愛子ちゃんが顔をぐいと近づけてきた。

「じゃあ元気の出るおまじないしてあげる」

そう言うと俺の唇が柔らかい感触に包まれた。

愛子ちゃんが、俺に、唇を重ねてきた。

暴走する自由奔放な女

私は敦也くんのバイクの後ろに乗って天文台に向かっていきます。

もうすぐプラネタリウムが始まってしまいます。

焦っている敦也くんには悪いのですが、私は少し嬉しいのです。

バイクの後ろに乗って彼に抱き着いていると、昔まだ中高生だったころに父のバイクの後ろに乗っているような場所に連れて行ってもらったことを思い出しました。

できるだけゆっくりと運転してくれればいい。

口には出しませんが心の中で強く願いました。

願っても空しくバイクは天文台についてしまいました。受付にチケットを出しましたがが始まっていたらしく中には入れてもらえませんでした。

せっかく来たので目の前の草むらで寝転がって星を

見ようと提案しました。

敦也くんは生返事でしたが、話を聞いていた天文台の職員さんが草に着いた露で濡れないようにとビニルシートを貸してくれました。

私は敦也くんの手を引いて草むらに向かいました。

そこでは、姿ははっきりと見えませんが見覚えのある人たちがいました。

幹事くんに愛子ちゃんです。

二人は草むらの中で抱き合ってキスをしていました。

長い長いキスでした。

「邪魔しちゃ悪いよね」

敦也くんもかなり驚いているようでした。

「そうですね」

私も彼の意見に賛成です。

私たちはビニルシートを返すとあの二人にはち合わせすると気まずいのですぐに山を下りることにしました。

帰り道は当然息と同じように敦也くんのバイクです。

彼に抱き着きながら私はある決心を固めていました。私は自分のしたいことが分かったのです。随分と遠回りをしていましたがわかったのです。胸のモヤモヤの原因と、それが敦也くんと一緒にいると治まる理由を自覚したのです。

私は敦也くんを一人暮らししているマンションではなく、父のいる実家の方に案内しました。

プラネタリウムを見逃したので時間は夜の八時です。これなら大丈夫そうです。

私は敦也くんを家にあげ、応接間に案内しました。座布団に正座している彼は少し居心地が悪そうです。

私は自分と敦也くんと父の三人分の麦茶を準備しました。私は敦也くんの横に座って父を待ちます。

すぐに父はやってきて、私たちの向かいに座りました。麦茶を半分ほど飲むと父は口を開きました。

「水奈、こんな夜にお客を招いて、話があるとはなんだ？」

父の声は重々しく、威圧感に満ちていました。

しかし、私は臆さず、敦也くんの腕に抱き着き、言い放ちました。

「お父さん、この人が私の好きな人です」

エピローグ

両想いのカップルの話

九月、僕が水奈さんと恋人になって最初の秋が来ようとしていた。

僕は水奈の部屋で就活のための準備をしていた。

せっかく恋人になって彼女の部屋のいるというのにどうして僕は業界地図を読んでいるのだろうか。

「はあ」

無意識にため息がこぼれてしまう。

そんなことを思いながら再び勉強に取り掛かった。

「こら、集中しろ。今日は二人で夕方まで勉強だぞ」

水奈はそう言うと言と僕に抱き着いてきた。

付き合い始めて分かったことだが彼女は抱き着いたりするといった大胆なことが好きなのだ。

「ああ、がんばるよ」

まだ、就職を希望する業界すら絞れていないが、水奈が急かすので八月はインターンシップにいったりと大変真面目な夏を過ごしていた。

「頑張ったらきちんと褒美あげるよ」

水奈のご褒美とは彼女の手料理だ。

「それはがんばらないとな」

僕はさっそく胃袋を水奈に握られつつある。

このままだといつのまにか水奈の尻に敷かれているかもしれない。まあ、それでもいいさ。惚れてしまった弱みだ。尻にでもなんでも敷かれてやろう。

FIN

あとがき

この冊子を手にとってくれてありがとうございます。読んでくれた読者がいることは作者として嬉しいかぎりです。

ではあとがきという名の謝罪コーナー

最後の方に行くほど雑になってごめんなさい

幹事と愛子のことエピソードに出さず放り投げてごめんなさい

締切まもらなくて本当にごめんなさい

でも今回は三人の視点から一つの出来事を表現するという前々からしたかったことができてすごく満足です。しかし、初挑戦ゆえに拙いところ、見苦しいところが多々あります。この作品に限らずアトラの作品についての感想は遠慮なく投稿ホームから伝えてください。

それでは息災で

